

南琉球・多良間島方言の格再考 : ni:格, Nka格を中心に

著者	下地 賀代子
雑誌名	国立国語研究所論集
号	7
ページ	227-249
発行年	2014-05
URL	http://doi.org/10.15084/00000533

南琉球・多良間島方言の格再考

—— ni: 格, Nka 格を中心に ——

下地賀代子

沖縄国際大学／国立国語研究所 共同研究員

要旨

下地 (2003) をはじめとするこれまでの先行研究では、多良間島方言の格の形式は、 \emptyset 格, nu 格, ga 格, ju 格, ba 格, ni 格, tu 格, sji: 格, kara 格, Nka 格, Nke: 格, gami 格の 12 形式 (周辺の接辞である juL, ti: を含めれば 14 形式) であるとされてきた。だが改めて考察を行ったところ, ni: 格という〈道具, 手段〉をあらわす新たな格形式をみとめる必要のあることが明らかになった。これは、これまで ni 格に含められてしまっていた形式である。また -Nka についても、格として機能するものと「中, 内」という語彙の意味を名詞に付加する派生接辞的なものという、2 つを区別して捉えなければならないことを明らかにした。

以上 2 点を中心に、本稿では多良間島方言の格について再体系化を行っている*。

キーワード：琉球語, 多良間島方言, ni: 格, 2 種類の -Nka

1. はじめに

多良間島方言の格に関する先行研究はあまり多くなく、格全体の体系化を試みた研究は下地 (2003) が最初のものとなっている。だが、同論文における個々の形式の意味、用法の記述は決して十分なものとは言えず、特に、今回報告する ni: 格の見落としは致命的なものとする。そこで本研究では、ni: 格, また -Nka という形式についての記述、考察を中心に、多良間島方言の格の再体系化を試みる。

表記の仕方について、1 行目に音韻表記¹、2 行目に語単位の逐語訳、3 行目に全体の意識を示している。意識について、助辞など文中に現れていない要素は () に入れて示す。{note.} は注記である。また逐語訳は Gloss の代わりとして用いており、基本的に想定される現代日本語共通語あるいは古典日本語との対応語形を記している²。また現代日本語共通語がそのまま用いられている場合はカタカナのイタリックで示す。このほか、一部以下のような略号も用いている。

* 本稿は国立国語研究所共同研究プロジェクト「消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究」(プロジェクトリーダー: 木部暢子) および、文部科学省科学研究費(基盤研究(A), 課題番号 24242014)「消滅危機言語としての琉球諸語・八丈語の文法記述に関する基礎的研究」(代表者: 狩俣繁久) の研究成果の一部である。また本稿の一部は「2012 年度前期 沖縄言語研究センター定例研究会」(2012.5.12 於琉球大学) における口頭発表を基としている。発表において貴重なご助言を下された皆さま、また調査にご協力いただいた皆さまへ心より御礼申し上げます。また、投稿の過程において査読者の方より大変有益なご意見を賜りました。重ねて御礼申し上げます。

¹ 本稿で用いている音韻表記の一部について、sj は [ʃ], cj は [tʃ], zj は [dʒ, ʒ], h は [h, ç], f は [f], v は [v~v] である。また N, M, L は成節的な子音であり、その音価はそれぞれ [n, j, ŋ, ɲ, ...], [m], [l] である。また促音は q であらわしている。

² なお、その語彙の意味が大きく異なる場合は語彙の意味において対応する語を示し、適宜 { } で注を付す。

「COP」：コピュラ（連辞）

「複 N」：複数をあらわす名詞的要素

「間投」：間投詞

「指小」：指小辞

また、音韻表記・逐語訳ともに助辞の切れ目に「=」を付した他、たずね文などにおける語尾の上昇を「ka[kī]（書く？）のように示している。

2. 多良間島方言の格の基本的な用法

まず、ni: 格および Nka 格を除く 11 の格形式の基本的な用法を概説する。多良間島方言の格の用法は水納島方言と共通するところが多く、詳細については下地（2012）も参照されたい。

2.1 Ø 格

多良間島方言の Ø 格は、現代日本語共通語のそれと同じくよびかけや提示、並立、数量や程度、また時をあらわす文の成分となる他、以下のような多様な文法的意味を実現する用法を持っている。

a. 主語になり、主に述語の指し示すモノゴトの状態や性質、存在の主体をあらわす。動作性述語の主語となる場合は ga 格、nu 格が用いられやすいようである。

- (1) cibusī jami:[L, aNna.
膝 痛んでいる 母
膝（が）痛んでいる？お母さん。

b. 補語となり、動作の直接的な対象をあらわす。対格的な ju 格との名詞の種類などによる差は見られない。

- (2) aN=ja kīnu: piNdazīru fu:taL.
私=は 昨日 山羊汁 食った
私は昨日山羊汁（を）食べた。

c. 移動をあらわす動詞述語の補語となり、経由するトコロや到達するトコロなどをあらわす。

- (3) nama=kara, kada:=nu micī, aikaqziba,
今=から 遠いさま=の 道 歩くから
今から遠い道（を）歩くから、
(4) iM=nu pata=M:na idi:,
海=の 端=など 出て
海の端辺り（へ）出て、

d. 場所名詞に後接し、動作や状態の成り立つトコロをあらわす状況語となる。

- (5) e.: uL=game:, mijakobjo:iN kaNgofu: si:L=sja:mi:
 間投 それ=までは 宮古病院 看護婦を している=さ
 ああ。その人なら、宮古病院（で）看護婦をしているよ。

e. 動詞 si: (する) や naL (なる) とくみあわさって、その実質的な内容を担う³。

- (6) zju:, be:ta: o:sara: sju.
 間投 私たちは お手玉 しよう
 さあ、私たちはお手玉（を）しよう。
- (7) sju:=ja, jama=N, {中略} tamunu si=ga wa:riqti:,
 主{祖父}=は 山=に 薪 し=に いらっしやって
 おじいさんは、山に、{中略}薪（を）取りに行かれて、
- (8) agai, Mme qva: sjiNsi:miduM nariqti: Mme, aNta=ga sima: kiN:=na:
 間投 もう あなたは 先生・女 なって もう 私たち=が 鳥は 来ない=な
 ああ、もうあなたは女（の）先生（に）なってもう、私たちの鳥（に）は来ない（だろう）ね。

2.2 ga 格と nu 格

いずれも主格および属格の用法を併せ持ち、いずれの用法で用いられるかにかかわらず ga 格は主にヒト固有名詞と代名詞に、nu 格はヒト以外の固有名詞を含む普通名詞一般に後接して現れる。またいずれの形式も、主節主語および従属節主語の両方に現れることができる。

a. 主語になり、述語の指し示す動作や状態、性質の主体をあらわす。

- (9) kaL=ga=du muqtu qfaiN munu kaNsj:
 あれ=が=ぞ 全く 太らない もの あのように
 あの子が全然太らないよね、あのように（痩せていて）。
- (10) kuNsj: aqca:taka: nu=nu=du ka:ki.
 このように 暑かったら 咽喉=が=ぞ 渴く
 こう暑かったら喉が渴く。

b. 連体修飾語となり、修飾される名詞が指し示すモノゴトの属性やそれに関係するモノゴトなどをあらわす。

³ si:, naL とくみあわさる Ø 格名詞の範囲については今後の課題としたい。なお、ju 格同様、動詞および形容詞語幹の Ø 格も si: とくみあわさることができる。

cf 1. agai, bataga:sja si=ke:=du munu fe: ne:N.
 間投 腹苦しさを する=程=ぞ もの 食って ない
 ああ、腹が苦しくなるまでのもの（を）食べてしまった。

2. mata, a:, nu:=gara:=nu, karaqfi=du sju:zi:=be:M=ti siwa=u situi,
 また 間投 何=やらの 企み=ぞ しよう=かもしれない=と 心配=を して
 また、何やらの、たくらみ（を）するのではと心配をして、

- (11) taro:azja=ga usimaku=Nke:=du, ata:magamaN ciki.
 太郎兄=が 牛暮(?){牛囲い}=へ=ぞ あっという間に 着く
 太郎兄さんの牧場へ、あっという間に着いた。
- (12) ina=nu akaci:=ju sji:gu=N mamitui ki,
 犬=の 赤血=を 小刀=に まみって 来て
 犬の血を小刀に塗ってきて、

またこの用法では、ga 格は deictic な時間名詞、nu 格はヒト代名詞相当でない数詞にも後接して現れる。

- (13) kju:=ga ju:=ju.
 今日=が 夜=よ
 今日の夜よ。{note. 友人が来る時間を尋ねられて}
- (14) pitukara=nu piNda=nu qfa=nu kumari: ki:ba,
 1匹=の 山羊=の 子=の 入って 来ば
 1匹の山羊の子が入って来たので、

2.3 ju 格 (-juba)

2.3.1 出現形式

ju 格(-juba⁴)はその出現環境によって、[j]の脱落、さらに融合現象⁵を起こすことがある。ただし、多良間島方言の ju 格では水納島方言や他の宮古諸方言とは異なり、(語幹)末尾音が N の語に後接する場合の順行同化は起こらない⁶。以下、出現環境ごとに示していく。なお、以下の語例の^{*}は現代日本語共通語からの借用、(塩川)は塩川集落(塩川方言)の語であることを示す。

・末尾音が長母音 u:, また M の場合、基本的に脱落・融合現象は生じない。

[語例] du:=ju(体を), aM:=ju(網を)

・末尾音が長母音 a:, i:, i: (, e:), o:, 連母音 ai, ui (, ei), また N の場合、[j]の脱落が生じることがある。

[語例] cja:=u(茶を), ki:=u(木を), tsi:=u(乳を), ^{*}sjo:re:=u(奨励を), po:=u(蛇を(塩川))
 nai:=u(実を), kui:=u(声を), ^{*}teisei:=u(訂正を), amaN:=u(カニを)

・末尾音が短母音 a, i, e (, o) の場合、基本的に [j] の脱落が生じる。

[語例] ifusja:=u(戦を), miki:=u(神酒を), (pitu=nu)Mme:=u(人々を), ^{*}kago:=u(カゴを)

⁴ 水納島方言と同じく、本研究では -juba を ju 格の「主題化形式」と仮に位置づけている(下地(2012)参照)。

⁵ ここでいう「融合」とは、助辞の後接によって名詞(語幹)末尾音に変化が生じる現象を指している。

⁶ 例えば「着物を」は、下地町来間方言(現宮古島市下地字来間)では tsinnu (< tsin=ju), 平良市狩俣方言(現宮古島市狩俣)では kinnu (< kin=ju), 水納島方言 kinnu (< kin=ju)となる(来間, 狩俣方言については野原(1998)より)。なお下地(2012)では、水納島方言の語末音が [m] である場合の融合現象について今後の課題としていたが、その後の調査によって [n] と同様の形式になることを確認した(ex. annu (< am=ju 「網を」))。これは、崎山(1962)ですでに指摘されているように、多良間島方言と異なり、水納島方言では /N/ と /M/ が対立していないことによると考える。

・末尾音が短母音i, uの場合, 基本的に[j]の脱落, 融合による長音化が生じる。

[語例] ka:sü: (菓子を (< ka:sï=(j)u)), ïzu: (魚を (< ïzu=(j)u))

・末尾音がLの場合, 基本的に[j]の脱落, 融合による促音化が生じる。

[語例] tuqru (鶏を (< tuL=(j)u))

なお, 上記の出現形式は1人称単数代名詞 aN, baN, 指示代名詞 kuL 類にはあてはまらない。前者では義務的に[j]の脱落と融合による長音化が生じ, 後者では基本的に[j]の脱落と融合による長音化が生じる。

(15) we:, ki:=nu pa:=gami=mai, anu:ba: kasjakasja=ti:=du buL=dara:na.

間投 木の葉までも私をば カシャカシャとぞ いる=だろう

ほら, 木の葉までも私を「カサカサ」と呼んでいるじゃないか。

(16) hai, banu:=du we: kaNsji: kacimi: buL.

間投 私を=ぞ 間投 あのように 掴んで いる

ねえ, (何かが)私を, ほらこのように掴んでいる。

(17) ki:=nu ni: sjura=u, ida=du ni:, ida=du sjura=ti:, kuru: bakasji:, nu:sjiru.

木の根 先を どこぞ 根 どこぞ 先と これを 分かって のせろ

木の根, 先を, どこ(が)根, どこ(が)先と, これを判別して(薩摩へ)献上しろ。

2.3.2 用法

a. 補語となり, 動作の直接的な対象をあらわす。このとき -juba が用いられると, 主題化されたり対比強調されたりする。

(18) mugicja:=u cuqfi: ukadaka: naraN.

麦茶=を 作って おかなければ ならん

麦茶を作っておこう?

(19) nama sjozjo, zju:su:ba numaN. cja:=ju=du nuM.

今 処女(娘) ジュースをば 飲まん 茶=を=ぞ 飲む

最近(の)女の子(は), ジュースは飲まない。お茶を飲む。

また, ju 格に係助辞 -du が伴う場合も数例だが現れている。いずれも肯定文に現れており, 用例 19 と同じく対比強調されている。

(20) ara, ukī:na:=ja, sjī:mi:=ju=du, seidai=N si:.

間投 沖繩=は 清明=を=ぞ 盛大=に する

あら, 沖繩は, (十六日祭ではなく)清明(祭)を盛大にする。

⁷文末の ~daka: naraN について, 現代日本語共通語の「~(し)なければならない」に対応する形式であるが, 必ずしも強い義務性は伴っていない。

- (21) sjo:miN=ju=du ke: ki: ukitaka:,
 素麺=を=ぞ 買って きて おいたら
 (お面ではなく) 素麺を買ってきてあったら,

b. 移動をあらわす動詞述語の補語となり、経由するトコロをあらわす。なお、ba 格にこの用法は現れていない。

- (22) kunu micü: masu:gu wa:Ltaka:, jakuba: uma=N aL.
 この 道を 真っ直ぐ いらっしやったら 役場は そこ=に ある
 この道をまっすぐ行かれたら、役場はそこにある。

c. 動詞 si: (する) とくみあわさってその実質的な内容を担う。この用法の ju 格は動作性の名詞以外にも、働きかけを受けて変化した結果のモノを指し示す名詞、また動詞および形容詞の準体形に後接し、si: のくみあわせ全体で自動詞のようにふるまっている。

- (23) uma=Nka wa:ri: panasi=gama=uba sjuda:, Mmē:
 そこ=に いらっしやって 話=指小=をば したら もう
 そこにいらっしやって話をして、もう。

- (24) jakizakana=u sjj:, umucu=N jakiqti:.
 焼き魚=を して 焚き火=に 焼いて
 焼き魚をして、焚き火で焼いて。

- (25) aNta=ga futa:L=du uipitu butaL. Mmē suminasü: sjj:
 私たち=が 2人=ぞ 老人 いた もう 済み(?)生しを して
 (運動会に) 私たち 2人 (だけ) 年寄り (は) いた。もう 高齢出産をして。{note. 子供の運動会で、高齢の母親が自分と話題の女性の 2人だけだった、ということ。}

- (26) nama=mai aNsji=du bu[L, gabjo:=uba sjj:
 今=も そのように=ぞ いる 痩せ=をば して
 (太郎は) 今もそのようにいる? 痩せて。

2.4 ba 格

ju 格の主題化形式 -juba の後部要素である ba が対格助辞化したものと考えられる。他の宮古諸方言にも見られる形式であり、単独で対格相当の文法的意味を実現するが、係助辞 -mai, -du などによってとりたてられない。

a. 補語となり、動作の直接的な対象をあらわす。なお、この用法の ba 格は ju 格に比べて少数である。

- (27) uL=ga tubikiM=ba nusumi: wa:ri:, kakigu: sjj: wa:LtaL=ti:
 それ=が 飛び着物=ば 盗み なされて 大事にしまうことを し なされた=と
 (里主は) その娘の羽衣を盗みなさって、隠しなされたようだ。

b. 動詞 *si:* (する) とくみあわさって、その実質的な内容を担う。主に動作性の名詞⁸、動詞準体形に後接し、*si:* のくみあわせ全体で自動詞のようにふるまっている。なお、形容詞準体形の *ba* 格に後接する用例は今のところ確認できていない。

(28) *sji: mata kuL=N=ja sjiqpai=ba sji: ne:N=ti:.*
 して また これ=には 失敗=ば して ない=と
 それでまた、この考えも失敗をしてしまったそうだ。

(29) *izi=mai tuL=ba sji:.*
 魚=も 取り=ば して
 魚も獲って、

2.5 N 格 (旧 *ni* 格)

これまで *ni* 格と呼んできたが、*-N* の形式で現れることの方が多く、後述する *ni:* 格との区別をやすくするため「N 格」と名称を改めることとする。間接的な対象や動きに関わる場所をあらわす用法を中心に、与格的な N 格と所格的な N 格、すなわち、現代日本語共通語の二格からデ格にまたがる意味・用法を持つ。

a. 補語となり、モノの移動先やとりつけ先、動作の向けられるあいてなど、間接的な対象をあらわす。

(30) *mī:gi=nu cinu=N=ja taragu:=ju sjagiru. pidaL=ni=ja ciga=u sjagiru.*
 右=の 角=には 俵=を 下げろ 左=には 一升=を 下げろ
 右の角には空き俵を下げろ。左には一升を下げろ。

(31) *haihai, uru:ba: qva=N qfidaka: baN=ja tau=N=ga qfi gumata=ga.*
 間投 それをば あなた=に くれなかったら 私=は 誰=にか くれる べき=か
 さあ、それはあなたにあげなければ、私は誰にあげるだろうか。{note. 反語。}

b. 受身文や使役文で、動作の主体をあらわす補語となる。

(32) *kīnu:=du du:=nu nika=nu kuruma=N panirari: sinitaqro:.*
 昨日=ぞ 胴{自分}=の 猫=の 車=に はねられて 死んだよ
 昨日私の猫が、車にはねられて死んだよ。

(33) *Nna qva=ga azja=N nu:=mai ke: ki: fa:sja=ti, i:taL=ti:.*
 間投 あなた=が 兄=に 何=も 買って 来て 食わせよう=と 言った=と

⁸ *ba* 格をとって動詞 *si:* (する) とくみあわさる名詞のタイプについては、*ju* 格と合わせ別途考察が必要である。下記のような用例も現れており、明らかな動作性を持つ名詞に限られていないことがわかる。

cf 3. *unu ina=gama: {中略} adaNjama=Nka=Nke: piNgi:, uma=Nka=u ja=ba sji:.*
 その 犬=指小は {地名}=に=へ 逃げて そこ=に=を 家=ば して
 その犬は{中略}アダン山へ逃げて、そこを住みかにして、

ええ、(ハナコが) あなたのお兄さんに何でも買ってきて食べさせようと、言っていたって。
 {note. 聞き手はハナコの夫の妹。}

c. 存在動詞，移動をあらわす動詞を述語とする文で，ヒト・モノのありかや移動の着点などをあらわす補語となる。場所名詞の N 格によって実現される。

- (34) aNsjiqti: kunu pīto: mida mi:=ja m:N sīma=N cīkība=du,
 そうして この 人は まだ 見て=は みない 島=に 着きば=ぞ
 そしてこの人はまだ見たことのない島に着くと，

d. 場所名詞に後接し，動作や状態の成り立つトコロをあらわす状況語となる。

- (35) qva: parami: buLba, saNgacišjanici=N buduLpama=N buduri: utušji: sutiru.
 あなたは 孕んで いれば {行事名}=に 踊り浜=に 踊って 落として 捨てろ
 あなたは (司家の神様の子を) 孕んでいるから，三月シャニツに踊り浜で踊って落として
 捨てなさい。

e. 主にトキを指し示す名詞に後接し，動作や状態が成り立つ状況をあらわす状況語となる。

- (36) seiteN=ba sjiqti: atu=N, kuma:kumanu, iLkikufumu=nu, atabakaL=N
 晴天=ば して 後=に 細々の うろこ雲=の 少しの程=に
 idiqti:, mata sugu suke:Ltaka: sugu amigata.
 出て また すぐ 散ったら すぐ 雨方
 晴天の後に，細かいうろこ雲が急に出て，またすぐ散ったら，すぐに雨模様 (になる)。

f. 述語の指し示すコトガラ，原因や理由をあらわす状況語になる。

- (37) ure go:kaku, ataL=ti: unu sju:=ga ukagi=N=[ju.
 それは ブーカク COP=と その 主{祖父}=が おかげ=に=よ
 それは合格だったそうだ。そのおじいさんのおかげでね。

g. 形式的な動詞 naL (なる), si: (する) などとくみあわせり，変化の結果や様子などその実質的な内容を担う。

- (38) pa:isja, mo:ke: mo:ke=N nari:L.
 歯医者 向い 向かい=に なっている
 歯医者 (は) 向かい。(あの家の) 向かいになっている。

- (39) akamaza ni:qti:, onigiri=N sj:, mutasitaL=dara:.
 赤飯 煮て ナニザツ=に して 持たせた=だろう
 赤飯 (を) 炊いて，おにぎりにして，持たせたでしょ。

h. mi:L (見える) など知覚をあらわす動詞とくみあわさって、その認識の内容をあらわす。

- (40) aga aN=ja ifucu=N=ga mi:[L].
 間投 私=は いくつ=に=か 見える
 ねえ、私はいくつに見える？

2.6 Nke: 格

移動の到着点をあらわす主要な形式であり、行ク・来ル、入レル・出スなど、動作の主体あるいは動作の対象が空間的な移動を伴う動きをあらわす動詞と結びつきやすい。

a. 移動をあらわす動詞を述語とする文で、到達するトコロや方向をあらわす補語となる。

- (41) ure nubasji:=ga Nda=kara=ga, aqzja=Nke: kumarazi:=ga.
 それは どうして=か どこ=から=か 畦=へ 入ろう=か
 これはどうやって、どこから、畦へ入ろうか。

- (42) uibe: uci=Nke:=du buriL.
 指は 内=へ=ぞ 折れる
 指は内側へこそ折れる。{note. 何かある時は親兄弟身内のことから考える、という意の諺}

b. 直接対象の移動先や動作のあいてなど、動作の間接的な対象をあらわす補語となる。

- (43) baraguru:, {中略} kuma:kuma kisiqti:, uL=Nke:, ma:sjumizü: kakitui,
 藁を 細々 切って それ=へ 塩水を かけて
 藁を、{中略}細かく切って、それへ塩水をかけて、

- (44) kuru: qva=Nke: qfizi:.
 これを あなた=へ くれよう
 これをあなたへやろう。

c. 述語動詞の指し示す働きかけを受けた対象の、変化の結果の状態をあらわす状況語になる。

- (45) upugi:=gama=na=nu munu:=du aNsjj: ju:cu=Nke: bari: jaki uki=do:.
 大きそうな=指小=な=の ものを=ぞ そのように 4つ=へ 割って 焼いて おく=よ
 大きなものを、そのように4つに切って焼いてあるんだよ。

d. 動作性を持つ名詞に後接して、移動の目的をあらわす状況語になる。

- (46) bikiduM=nu sigutu=Nke:, tubitika,
 男=の 仕事=へ 飛んたら
 夫が仕事へ行ったら、

2.7 kara 格

現代日本語共通語のカラ格と同じく起点をあらわす用法をその中核としつつ、他の琉球諸方言と同じく、経由地や動作の手段をあらわす用法を持っている。

a. 移動をあらわす動詞を述語とする文で、起点となるトコロをあらわす補語となる。

- (47) tarama=nu pītu=nu=du, me:ku=kara muduL ba:=N,
 多良間=の 人=の=ぞ 宮古=から 戻る 場合=に
 多良間の人が、宮古から戻るときに、

b. 移動をあらわす動詞を述語とする文で、経由するトコロをあらわす補語となる。ju 格にも見られる用法である（注 17 も参照）。

- (48) tauka: junagata=nu mici=kara aLkitaka: utuqra:L.
 1人 夜=の 道=から 歩いたら 恐ろしい
 1人（で）夜の道を歩いたら怖い。

c. 直接対象の移動元やもちぬしなど、動作の間接的な対象をあらわす補語となる。

- (49) e:bigu:=nu naka=kara munu:=du turi:L.
 アワビ=の 中=から ものを=ぞ 取っている
 アワビの中から中身を取ってある。

- (50) oba:=kara nu:=ju=ka naru:buqsa:L=ti:
 おば=から 何=を=か 習いたい=と
 おば=から何か習いたって。

d. 述語の指し示す動作の空間的・時間的な起点、契機となるコトガラをあらわす補語となる。

- (51) pama=Nke: tauka: isjugi: buL, junasu:, cibi=kara abiL pītu=nu buL.
 浜=へ 1人 急いで いる ユヌスを 尻=から 呼ぶ 人=の いる
 浜へ1人急いでいるユヌスを、後ろから呼ぶ人がいる。

- (52) mazu pazīme: rju:=nu kutu=kara naru: ba:.
 まず 始めは 龍=の こと=から 習う 場合
 (占者に) まず始めは龍のことから尋ねた(という)ことだ。

e. 述語の指し示す動作の、手段や材料をあらわす補語となる。

- (53) haruko=ga=du, kuruma=kara sja:ri: ikazi:.
 ハルコ=が=ぞ 車=から 連れて 行こう
 ハルコが、車で連れて行こう。

- (54) to:fu: mami=kara cuqfi
豆腐は 豆=から 作る
豆腐は豆から作る。

2.8 tu 格

補語となり、共同作業や相互的な関係のあいてなど、間接的な対象をあらわす⁹。

- (55) oto:=tu=du icjafu ari:, icjafububama=du naL=ti=nu ba:=sja:mi:
オト=と=ぞ いとこ COP いとおば=ぞ なる=と=の 場合=さ
(あなたとこの子の) お父さんがいとこだから、いとおば(に)なるということだよ。

2.9 sji: 格

サ変動詞 si: (する) の中止形 sji: (して) に起因する形式である。道具や手段、材料をあらわす補語となる。ヒトを指し示す名詞がこの形式をとる場合、動作の主体を間接的にあらわすことになる(用例 57)。

- (56) muti: butaL izjara=sji: tura=nu zju:=ja nagikisi:,
持って いた 鎌=で 虎=の 尾=は 薙ぎ切って
持っていた鎌で虎の尾を薙ぎ切って、
- (57) zju:zju: misita:L=sji: iki:, kacumi: mi:,
間投 3人=で 行って 掴んで みよう
さあさあ、3人で行って、掴んでみよう。
- (58) sjaki=uba: mai=sji:=du cuqfi.
酒=をば 米=で=ぞ 作る
酒は米で作る。
- (59) sjitai, qva=ga uNmei=ja kju:=sji: pariqtam.
間投 あなた=が 運命=は 今日=で 晴れた
でかした、あなたの運命は今日で晴れた。

2.10 gami 格

動作などが及ぶ範囲をあらわす補語となる。-gami には格関係をあらわす格助辞にあたるものとりたてをあらわすものがあり、これらは同音形式である(用例 15 参照)。また、動作や状態が達成されるまでの限定された範囲をあらわす用法も見られるが、この場合は係助辞 -ja が融合した -game: という形式が現れやすい。

⁹ その他引用節を受ける -tu の用例も現れているが、多良間島方言ではこの場合 ti: を用いるのが普通である。

- (60) sa:, usi=gama, sa: ba=ga maqvul, ja:=gami niNgakiN pari: qfiru
 間投 牛=指小 間投 私=が 守り神 家=まで 念掛けに 走って くれ
 さあ, 牛よ, さあ私の守り神 (よ), 家まで一生懸命走ってくれ。
- (61) sjicizi=game: ku:zi.
 7時=までは こよう
 7時までには来る (よ)。

3. 〈道具, 手段〉をあらわす新たな格形式—ni: 格

第1節でも述べたように, このni: 格は下地 (2003) ではN格 (旧ni格) に含まれ, 見落とされていたものである。だが改めて分析, 考察を行ったところ, N格とは異なる格形式の1つであることが明らかになった。それは何よりも, 道具や手段, 材料をあらわす用法において-Nという形式を用いることができない, というシンプルな理由による¹⁰。さらに-ni: は, -Nとは異なり, 複合連体格の要素となることもできる (用例 103 参照)。

ではなぜ両形式が混同されていたのか。それは, ni: 格にも移動の到達点やありか, あいて, 原因といったN格に重なる用法が見られることによる。以下, ni: 格の具体的な用法を記述し, さらに道具, 手段をあらわす用法を持つsjj: 格, kara 格との比較を行う。

3.1 ni: 格の用法

a. 動作を行うための道具や手段をあらわす補語となる。また後に見るように, この用法のni: 格の用例はいずれもsjj: 格に置き換えることができる。

- (62) izara=ni: fukü: gasugasu=ti: kisiqti:=-ja nu:ma=u sa:ti, aLkasiaLkasi.
 鎌=で 茎を ガスガス=と 切って=は 野馬=を さっと 歩かす歩かす
 鎌で茎をガスガスと切っては, 馬をどんどん歩かせる。
- (63) taramafuci=ni: panasji wa:ri.
 多良間口=で 話し なされ
 多良間方言でお話し下さい。
- (64) “o:”=ti muqtui iki: nakada=Nka miutu=ni: unu usü: ma:sji,
 間投=と 持って 行って 台所=に 夫婦=で その 白を 回して
 「はい」と (石臼を) 持って行って台所で夫婦でその白を回して,

b. モノの移動先や動作の向けられるあいてなど, 間接的な対象をあらわす補語となる。ここから以下の用法はいずれもN格と重なっている。

¹⁰ 用例 24 に現れている umucu=N (焚き火に) は手段の用法と捉えられるが, このような用例はこの1例のみであり, 翻訳法による調査ではみとめられなかった。また津波古 (1979) でも, -n を与格 (あいて格, ありか格, しどころ格) として, -ni: を, -ji: と共に具格 (てだて格) として挙げている。

- (65) aNti, kunu pagi=u kuma=ni: nu:sitaka: kuNsji fuguM.
 それで この 脚=を ここ=に のせたら このように くぼむ
 それで、この脚をここにのせたらこんな風にくぼむ。
- (66) nara=ga upuMnukasja:, muti wa:ri unu futa:L=ni: kaqvasi: ucikiqti:,
 自分=が 大箕笠は 持って なされて その 2人=に 被せて 置いて
 自分の大きな箕笠を持ちなさせて、その2人に被せて置いて、
- (67) aN=ni: Nna:, nu:=ti=ga i:taL, haruko:, aruba mida qsaN=na=ti:.
 私=に 間投 何=と=か 言った ハルコは あれをば まだ 知らん=な=と
 私に、ええと何と言った、ハルコ(が)、あのことはまだ知らないねと(聞いた)。

c. 場所名詞に後接し、存在動詞、移動をあらわす動詞を述語とする文においてヒト・モノのありかや移動の到達点などをあらわす補語となる。

- (68) ja:=kara Mme, kanu to:[mi, kama=ni: idi: Nna,
 家=から 間投 あの 遠見 あそこ=に 出て 間投
 家からも、あの遠見台(ね)、あそこに出て、ええと、
- (69) uine:cizi=ti:, kanu: MtabaLugaM=nu, kusi=nu kata=ni:, udakinu cizi=nu aL.
 {地名}=と 間投 土原御願=の 腰{後}=の 方=に その高さの 丘=の ある
 ウィネー丘って、あの、土原御願の後ろの方に、大きな丘がある。

d. 動作や状態の成り立つトコロをあらわす状況語となる。

- (70) ke: kama=nu, gagina=ni=du, upuganu sji:niN=nu nini: buLruga,
 間投 あそこ=の 芝=に=ぞ その大きさの 青年=の 寝て いるが
 ほら、あそこ芝生に、大きな青年が寝ているけど、
- (71) unu ki=ni:, Nna kigai=ba sji:,
 その 木=で 間投 ナグエ=ば して
 その木で、着替えをして、

e. トキを指し示す名詞に後接し、動作や状態が成り立つ状況をあらわす状況語となる。

- (72) agai nama:, me: buL=ga=jara nu:=ga=jara=nu, =daki=nu, jasjai=nu=mai=du,
 間投 今は 生えて いる=か=やら 何=か=やら=の =だけ=の 野菜=の=も=ぞ
pitui=ni: naL nari:L gumata=na,
 1日=で 実 なっている べき=な
 おや、今芽吹いているかどうかというだけの野菜が、1日で実(が)なっているものなのか、

f. 述語の指し示すコトガラ、原因や理由をあらわす状況語になる。

- (73) *sji:du, uNsjuku, mausji=ga kī:mai=ni:, bikiduM=nu ja:=ja, ujaki=N nari:.*
 それで うんと {人名}=が 福德=で 男=の 家=は 裕福=に なって
 それで、モーシの福德で、夫の家はうんと裕福になった。

このように、*ni:* 格には現代日本語共通語の二格からテ格にまたがる用法が見られ、*N* 格と大きく重なっていることがわかる。だが、*N* 格には *a* の道具や手段をあらわす用法がなく、またその他の *b* から *f* の用法の実現には *ni:* 格よりも *N* 格が多く用いられることから、*ni:* 格の中核的な用法は〈道具、手段〉であると考えられる。この *ni:* 格に対応する格形式は、他の琉球諸方言では今のところ水納島方言の *ne:* 格しか確認できていないのだが、*ne:* 格は専ら〈道具、手段〉をあらわす形式であり、*ni:* 格よりも意味の広がり狭い¹¹。

3.2 〈道具、手段〉をあらわす格形式の比較— *ni:* 格, *sji:* 格, *kara* 格

前節で *ni:* 格の具体的な用法を示した。ここでは、同じく道具や手段、材料、また原因の用法を持つ *ni:* 格, *sji:* 格, *kara* 格を比較していく¹²。

まず、動きを実現するための「手段」、またモノを新たに作り出すための「材料」をあらわす用法にはいずれの形式も用いることができる。

- (74) *sjake: māi [=ni:/=sji:/=kara]=du ciqfi.*
 酒は 米=で=ぞ 作る
 酒は米で作る。
- (75) *kuruma [=ni:/=sji:/=kara] Mkai=ga kuqzjiba, mati:ri=jo:.*
 車=で 迎え=に 来ようば 待っておれ=よ
 車で迎えに行くから待っていなさいよ。
- (76) *uja=ga ti:=N kakaL=juqra:, du: [=ni:/=sji:/=kara] siM=do:*
 親=が 手=に かかる=よりは 胴{自分}=で する=ぞ
 親の手にかかるよりは自分で死ぬぞ。

だが、具体的な「道具」をあらわす用法では *kara* 格を用いることはできない。また、手や足など体の一部、そこに付帯するモノや状態が動きの「手段」となる場合も *kara* 格は現れない。これは、複合連体格の場合も同様である。なお、用例 78 は *Nka* 格によってもあらわされる（用例 87 参照）。

- (77) *fudi [=ni:/=sji:/=*kara] zī:=ju kakitaL.*
 筆=で 字=を 書いた
 筆で字を書いた。

¹¹ なお、水納島方言の *sji:* 格には具体的な「道具」をあらわす用法がみとめられず、*ne:* 格のみによって担われている（下地 (2012) より）。

¹² 本節の意味カテゴリーの分析については査読者の方からのご助言に依るところが大きい。

- (78) nabi【=ni:/=sji:/*=kara】 ju:=u fukasji.
鍋=で 湯=を 沸かせ
鍋で湯を沸かしなさい。
- (79) kanu qfa: hadasji【=ni:/=sji:/*=kara】 ma:ri:L.
あの 子は 裸足=で 回っている
あの子は裸足で（あちこち）歩き回っている。

また「原因」の用法では ni: 格をとるのが普通であり, sji: 格を用いるとやや不自然な文に, kara 格を用いると全くの非文になる。なお, この用法は N 格によってもあらわされる (用例 37 参照)。

- (80) kadi【=ni:/△=sji:/*=kara】=du bo:sji=nu tubitta.
風=で=ぞ 帽子=の 飛んだ
風で帽子が飛んだ。

このように, いずれの用法にも用いられる ni: 格に対し, sji: 格, kara 格には用法の制限があることがわかる。これは「変化」の観点から説明することができる。まず, 用例 74～76 では kara 格が使えるのに, 用例 77～80 では使えないことについて考える。用例 75, 76 の「車」「自分」について, これらは動きを実現するための「手段」であると同時に, それぞれ移動の主体, 変化の主体ともなっている¹³。この点において用例 79 の「裸足」とは異なっており, 「車」「自分」は単なる「手段」ではないことがわかる。そして, 用例 74 の「米」も「材料」＝「酒」に変化する主体であること, また, 用例 77～79 の「筆」「鍋」「裸足」はいずれも, それ自体が変化するのではなく, 新しいモノや状態（「字」「湯」「走り回る」）を生み出すために用いられるモノ（＝「道具・手段」）であるということから, kara 格の用法はその名詞（語幹）が変化の主体でもある場合に限定されている, ということが言える。また用例 80 で sji: 格が用いられにくいのは, 「帽子」の位置を変化させる「風」が偶発的な現象（＝「原因」）だからと考える。したがって, sji: 格は用例 77～79 のような意図的な変化に関わるモノをあらわしやすく, 用例 80 のような偶発的な変化に関わるものはあらわしにくい, ということが言えるだろう。

以上をふまえ, これら3つの格形式の異同関係をまとめると表1のようになる。すなわち, 〈道具, 手段〉をあらわす格形式の中核は ni: 格と sji: 格であり, その両者の間にも「原因」の用法においては使いやすさの違いがみとめられる。なお, ni: 格がありかや到達点など幅広い用法を持つのにに対し, sji: 格は専ら〈道具, 手段〉をあらわす形式である。また「手段」の用法について, ni: 格, sji: 格がその名詞（語幹）が指し示すモノ自体の変化の有無に無関心であるのに対し,

¹³ 多良間島方言においても, 車や船はヒトと同様の扱いを受けることがある (cf 4)。よって用例 75 の「車」も単なる移動手段なのではなく, 用例 76 の「自分」と同じく変化の主体と捉えることができる。

cf 4. sambasji=Nka funi=nu buL.
栈橋=に 船=の いる
栈橋に船がいる。

kara 格はその名詞（語幹）が変化の主体の場合に限って用いられる。

表1 〈道具, 手段〉をあらわす格形式の異同関係

	材料／手段 (=主体)	道具・手段	原因
ni: 格	○	○	○
sj: 格	○	○	△
kara 格	○	×	×

4. 多良間島方言の2つの -Nka

これまで -Nka は、現代日本語共通語のニ格、テ格に相当する用法の見られる格形式の1つとして位置づけられてきた。下地（2006）では、多良間島方言の N 格、Nke: 格との違いについても考察し、「Nka 格が実現する空間的な意味は静的であり、また、その形式をとる名詞によって指示されるトコロが、周囲との間に明確な境界を持つ「一定範囲の空間」¹⁴であることから、Nka 格には〈内部性〉とでも言うような文法的意味特徴があることが想定される」(p. 93) ことを示している。だが一方で、-Nka には他の格形式とは異なるふるまいがみとめられる。

以下、-Nka を格形式に含めることの妥当性を再検証していくとともに、もう1つの、非格的な -Nka の具体的な意味・用法を明らかにしていく。

4.1 格助辞 -Nka の用法

多良間島方言の -Nka は専ら空間的な意味を実現する形式であり、場所名詞やモノ名詞に後接して動作や状態の関わるトコロをあらわす用法がみとめられる。

a. 存在動詞とくみあわさり、モノやヒトなど存在の主体のありかをあらわす補語となる。

- (81) ida=Nka buL=ga. ida=N=ga, we:, ××ja:=N[ka, kuma=N[ka.
 どこ=に いる=か どこ=に=か 間投 [屋号]=に ここ=に

どこにいるか。どこに、えー、××家に？(それとも)ここに？{note. 滞在先を尋ねている}

- (82) iki: mi:taka:=du, kugani=nu kami=Nka iqpai aLba,
 行って みたらず 黄金=の 甕=に イッパイ ありば

行ってみると、黄金が甕にいっぱいあるので、

b. 移動動詞とくみあわさり、その移動の主体のゆきさきをあらわす補語となる。このとき、そのゆきさきである名詞句の指し示すトコロが、「移動」の後にその移動主体が「とどまる」トコロともなっている点で、同様の用法を持つ ni 格および Nke: 格があらわすゆきさきの意味とは異なっている。

¹⁴ 岡田（2003: 107）より。なお、この「一定範囲の空間」という表現については宮島（1972）からの借用であることが明記されている。

- (83) uma=Nka wa:ri: panasi=gama=uba sjuda:, Mme:
 そこに いらっしゃって 話=指小=をば したら もう
 そこにいらっしゃって話をして, もう。
- (84) qsituL Mni=nu, {中略} paLmatamadara=ga zi:=Nka ki:, juke:, buLba=du,
 白鳥 群れ=の {人名}=が 地=に 来て 休んで おりば=ぞ
 白鳥 (の) 群れが, {中略} 波利間タマダラの畑に来て, 休んでいて,

c. モノの空間的な移動, 出現などを含意する状態変化動詞とくみあわさり, その移動先やイレモノ, 現れるトコロなどをあらわす補語となる。用例 87 の「鍋」は道具・手段的であるが, 対象 (水) を「鍋」に「イレル」ことが述語の指し示すデキゴト (「沸かす」) の成立の前提条件となっていることから, 派生的な用法と考える。

- (85) unu isjiusu=ja katamitui, iM:ke: uri:, funi=gama=Nka nu:qsjiqti:,
 その 石臼=は 担いで 海へ 下りて 舟=指小=に 乗せて
 その石臼を担いで, 海へ下りて, 舟に乗せて,
- (86) bu:=ju Mmi: magu=Nka iziL.
 麻を 纏って {かごの一種}=に 入れる
 麻を纏ってかごに入れる。{note. 茅で丸く編んで作られるかごの一種。}
- (87) ara Mme, upuginu nabi=Nka mizü: fukasji: wa:ri
 間投 もう 大きな 鍋=に 水を 沸かして なされ
 ではもう大きな鍋に水を沸かして下さい
- (88) kamadu=Nka umacu: tacikiL.
 かまど=に 火を 焚きつける
 かまどに火を焚きつける。

d. 述語の示すデキゴトについて, その成立するトコロをあらわす状況語となる。

- (89) sju:=ja icimai urazja=Nka=du nini: wa:LtaL.
 主{祖父}=は いつも 裏座=に=ぞ 寝て いらっしゃった
 おじいさんはいつも裏座で寝ておられた。

このように, 多良間島方言の -Nka には現代日本語共通語の二格, デ格に相当する用法がみとめられ, 同方言の他の格形式と同じく, 名詞 (語幹) に後接し, その名詞句の文中における統語的役割, また他の要素との意味的關係を明らかにしている。この点において, 上記の -Nka は極めて格助辞的であると言ってよいだろう¹⁵。

¹⁵ なお, 水納島方言の Nka 格もほぼ同様の用法を持っている (下地 (2012) 参照)。また同じく -Nka という形式を持つ津堅島方言について, 又吉 (2006, 2007) でもほぼ同様の指摘がなされている。津堅島方言の Nka 格にも, 「人や物の存在場所」「人の停留/占有場所」「物を移動させ, その移動先である停留場所」を

4.2 非格助辞の -Nka

一方、-Nkaには他の格形式とは異なるふるまいがみとめられる。すなわち、その他の格助辞と共に、一見複合格助辞的に用いられることが少なくないのである。-nuと重なって複合連体格となる場合を除き¹⁶、このようなふるまいは-Nka以外のいずれの格形式にも見られない¹⁷。以下、共起する格助辞ごとに用例を示していく。

・ju格との重なり

用例 90, 91では「定める」「きれいにする」対象をあらわす補語、用例 92では「歩く」という動作によって経由するトコロをあらわす補語となっている。いずれの用法もju格単独でみとめられるものであるが、-Nkaを伴う場合、前者の直接対象の用法でもその名詞（語幹）はある空間、範囲を指し示す名詞に限られる。

- (90) ara kunu zju:=ba urusji:, kunu zju:=sji:, ana=Nka=u sjadami: mi:=na:,
 間投 この 尾=ば 下ろして この 尾=で 穴=※=を 定めて みよう=な
 じゃあ、この尾を下ろして、この尾で、穴を定めて探ってみよう、

- (91) ja:=Nka=uba: icimai kicigiN sjiru.
 家=※=をば いつも 綺麗に しろ
家はいつもきれいにしなさい。

- (92) jarabi=nu=du paL=Nka=u mata aLki: uki.
 童=の=ぞ 畑=※=を また 歩いて おく
 子供がまた畑を歩いた（な）。

・Nke:格との重なり

用例 93, 94では「行く」「忍び込む」という動作による主体のゆきさき、また用例 95では「入れる」対象のイレモノをあらわす補語となっている。そして、前者は主体の移動した後に「とどまる」トコロともなっている（注 8 の cf 3 も参照）。すなわち、ju格と重なる場合と同じく、その名詞（語幹）は空間、範囲を指し示す名詞に限られている。よって例えば、先に挙げた用例 42～44のNke:格の名詞句（「内側へ」、「藁へ」、「あなたへ」）に-Nkaを挿入することはできない。

表示するという場所格としての用法（又吉 2006）、また「物の位置移動に必要な道具」「形質（状態）の変化に必要な道具」「状態変化を促す材料（容量を持つ）」を表示する道具格としての用法（又吉（2007）では「手段格」）がみとめられており、多良間島方言のNka格の用法とほぼ重なる。

¹⁶ 多良間島方言には -Nkanu, -Nke:nu, -karanu, -tunu, -sji:nu, -ni:nu, -gaminu の 7 つの複合連体格が現れる。用例 99～105 を参照。

¹⁷ ただし、-ju と -kara が重なって現れている用例が 1 例確認されている。

cf 5. Nna=u sjaukitui, unu gama=u=kara nuNdi: Mme,
 縄=を 引っ張って その 洞窟=を=から 出て もう
 縄を引っ張って、その洞穴から出てもう、

- (93) e:, pa:ma=Nka=Nke: iki: sja:ri iki asibasi=sja:mi:, sji:
 間投 浜=※=へ 行って 連れて 行って 遊ばす=さ 間投
 えー、浜へ行って、連れて行って遊ばせるさ、そうよ。
- (94) nakada=Nka=Nke: sinubikumi:, unu isjiusü: nusuMtui iM:ke: uri:,
 台所=※=へ 忍びこんで その 石臼を 盗んで 海へ 下りて
台所へ忍び込み、その石臼を盗んで海へ下り、
- (95) kami=u o:gasjiqte:, uL=Nka=Nke: mi: Msju: izitaL.
 瓶=を 仰がして それ=※=へ 新しい 味噌を 入れた
 瓶を空にして、それに新しい味噌を入れた。

・kara 格との重なり

用例 96, 97 では、「生える」「下りる」という動きの起点となるトコロ、用例 98 では「歩く」トコロをあらわす状況語となっている。いずれの用法も kara 格にもみとめられるものであるが、前者の用法の「土」「雲」は単なる起点ではなく、その動きの生じる以前に主体が存在したトコロという意味が含意されている。また後者では経由地ではなく「歩く」範囲が示されている、つまり「浜」を散歩しているように捉えられる。なお、用例 98 の -Nka を取り除くと移動の起点の意味になる¹⁸。

- (96) paL=Nka=nu, Mta=Nka=kara uNsji muiL.
 畑=に=の 土=※=から そのように 生える
 (地海苔は) 畑の、土からそのように生える。
- (97) tiN=kara=nu qfu fumu=Nka=kara, kanigagi=nu uri: ki:,
 天=から=の 黒い 雲=※=から 金鉤=の 下りて 来て
 天からの黒雲から金鉤が下りてきて、
- (98) sju:=ja pama=Nka=kara=du aLki: wa:LtaL.
 主{祖父}=は 浜=※=から=ぞ 歩いて おられた
 おじいさんは浜を歩いていらっしやった。

以上、-Nka とその他の格助辞とが共に用いられる場合を見てきたが、ここから次のようなことが言える。すなわち、これらのいずれの用例においてもその名詞（語幹）に共通の意味的制限

¹⁸ kara 格の経由地をあらわす用法は、ju 格とは異なり、「起点」とは捉えられない名詞（語幹）の場合に限られるようである。例えば以下の用例はいずれも「歩く」トコロがあらわされているが、その名詞（語幹）が指し示すものは具体的な「場所」ではなく、「日差し（の中）」という抽象的な空間である。pi:tiL という語単独では空間名詞として不安定であり、ju 格の場合、以下の用例から -Nka を取り除いてしまうと少々不自然な文になってしまう（cf 6）。だが kara 格の場合、-Nka は必ずしも必要ではないという。これは、pi:tiL と aLki という語のくみあわせが「起点」とはなりえず、経由地としての解釈しか成り立たないためであろう。

cf 6. pi:tiL=Nka=u aLkitaka: pimaki=du si:
 日の照っているさま=中、内=を 歩いたら 日負け(?)=ぞ する
 (こんな) 日差しの中を歩いたら日焼けする (ぞ)。

7. pi:tiL(=Nka)=kara aLkitaka: pimaki=du si:
 日の照っているさま(=中、内)=から 歩いたら 日負け(?)=ぞ する
 (こんな) 日差しの中を歩いたら日焼けする (ぞ)。

がみとめられ、さらにその文中における統語的役割、すなわち、くみあわされる述語動詞との結びつきは、-Nkaではなく後に重なるその他の格要素によって実現されているということである。つまり、このときの-Nkaは格として機能していないと考える。

ただし、-nuが重なる場合と同じく、まだ複合格助辞として扱う可能性は残されている。このことに関して、柴田（1957）の現代日本語共通語の「-の」に関する記述を以下に示す。

ところで、/no/を「格助詞」¹⁹に入れると、「学校への連絡」「学校との話し合い」「学校からの通知」「学校での成績」というように、格助詞が二つ重なる場合があらわれる。これを、二つの格助詞がそれぞれ独自の機能を持っていると考え、それぞれの格に一定した統語的機能がないということになり、格の機能として望ましくない。事実、これらの場合の機能は、/no/が総括している。だから、これらは、/eno, tono, …/のような、格助詞の複合したもの（「複合格助詞」と言おう）として扱わなくてはならない。（柴田 1957: 213-214）

ここから、多良間島方言の複合連体格と「-Nka + その他の格助辞」という形式との間には決定的な違いがあることがわかる。つまり、「その他の格助辞 + -nu」形式の主な用法も規定語となって後に続く名詞の指し示すモノゴトの特徴を付与したり限定したりすることであり、共通の構成要素 -nu がその文法的意味機能を「総括」していると言える。これに対し、「-Nka + その他の格助辞」形式にはそのような「総括」がみとめられない。また、複合連体格の「その他の格助辞」にはその名詞句が規定する名詞（語幹）との意味的な結びつきが依然保たれているのだが（用例 99～105）、上で見た -Nka にはそれがみとめられない。

(99) uma=Nka=nu jumi=gama:, paL=Nke: tubi:[L. aNga:.

そこ=に=の 嫁=指小は 畑=へ 飛んでいる 姉

その嫁は、畑へ行っている？ 姉さん。 <そこに【いる】嫁>

(100) upudatiMniazi=nu, takaramunu:ba:, kanuju:=Nke:=nu cicitu=ti:,

{人名}=の 宝物をば あの世=へ=の 土産=と

大立峰按司の宝物を、あの世へのみやげと、 <あの世へ【持っていく】みやげ>

(101) unu ba:=N, unu sibuL=kara=nu, idi mizi=nu,

その 場合=に その 冬瓜=から=の 出る 水=の

その時、その冬瓜からの出水が、 <冬瓜から【出る】水>

(102) baN=ja, tujumiganasi=nu puka=N=ja, Nna muqtu aNsjji: pitu=tu=nu

私=は {人名}=の 外=に=は 問投 全く そのように 人=と=の

kaNki:=ti:=ja ne:Nsjuga,

関係=と=は ないが

私は、豊見親様の他には、そのような他人との関係は全くないけど、 <人と関係【する】>

¹⁹ 本研究の立場からすべて「格助辞」と読み替えるものとする。

- (103) bikiduM=nu Mme: taci=ni:=nu tatakai=u sitaL.
 男=の 複Nは 太刀=で=の タタカイ=を した
 男たちは太刀での戦いをした。 <太刀で【戦う】>
- (104) kutuba=nu, kutuba=daki=sji:=nu orei=ti:=ja, karugarusji: ari:,
 言葉=の 言葉=だけ=で=の オレイ=と=は カルガルシイ COP
 言葉の, 言葉だけでの御礼とは, 軽がるしいから, <言葉だけでおれ【する】>
- (105) cju:o:bjoi:N:=mai, jozi=gami=nu {中略} ro:ziN=nu Mme asubasi munu=mai aL.
 中央病院に=も 4時=まで=の 老人=の 複N 遊ばす もの=も ある
 中央病院にも, 4時までの, {中略} お年よりたち (を) 遊ばせるものもある。{note. 「もの」
 = サービス} <4時まで【遊ばせる】サービス>

4.3 多良間島方言の2つの -Nka 一格助辞と派生接辞

以上の記述から, 多良間島方言の「-Nka + その他の格助辞」という形式は複合格助辞としてみとめられないこと, さらには, この形式における -Nka には格助辞としての文法的機能そのものがない, ということが明らかになった。では, この格助辞ではない -Nka とは何なのか。

4.2 で挙げた用例の名詞 (語幹) は, 4.1 で示した Nka 格の場合と同じく「内部」 (= 空間, 範囲) を持つ「モノ」を指し示していた。そこからまず, 「中, 内」などの意味をあらわす相対名詞であることが考えられる。だがこの位置づけは, 以下に示す naka (中), basji (間) といった相対名詞に後接している用例の存在によって即座に否定される。またそもそも, 名詞 (語幹) を伴わない -Nka の用例がこれまで1例も現れていない。

- (106) o:kami=mai sje: sja:ru: kacimitui, utiNkasjamaN=ti: piki:. naka=Nka=kara:
 狼=も 急いで 猿を 掴んで 落ちませないと 引いて 中=※=からは
 sja:ru=nu zju:=sji:, tuNdi: ku:=ti siba,
 猿=の 尾=で 飛んで 来よう=と しば
 狼も慌てて猿を捕まえて, 落ちさせないと引いた。中からは (泥棒が) 猿の尾で飛び (出て) こようとするから, {note. 尾を引っ張っているということ}
- (107) muguri: iki:, unu taku=nu mi: basji=Nka=Nke: sji:gu: tatakīNki:,
 潜って 行って その 蛸=の 目 間=※=へ 小刀=を 叩き込んで
 潜って行って, その蛸の目(の) 間へ小刀を突き刺して,

続いて, 以下の Nke: 格の例文を見ていきたい。いずれの用例も起点となるトコロ (「畑」「岩」) から海へ「下りる」(uritaL) ²⁰ という語のくみあわせとなっているが, -Nka を伴うか否かによって大きく意味が異なってくる。いずれも移動によって到達するトコロではあるが, 用例 109 での

²⁰ 多良間島では集落や畑から海へ至る道はすべて下り坂となっており, 海へ行くことを uriL (下りる) と表現するのが普通である。

主体の移動先は海の「中」である。

(108) paL=kara iM:ke:(< iM=Nke:) uritaL.

畑=から 海へ 下りた

畑から海へ行った。

(109) isjiabana=kara iM:ka=Nke:(< iM=Nka=Nke:) uritaL.

海中から出ている岩=から 海※=へ 下りた

岩から海(の)中へ入った。

以上のことから本研究では、この -Nka を「中、内」という語彙的意味を名詞に付加する派生接辞、あるいは接辞化（文法化）の過程にある語彙的要素と考える。

5. 多良間島方言の格体系再考

ここまで、ni: 格, Nka 格を中心に、多良間島方言のそれぞれの格形式について改めて考察、記述を行ってきた。その結果をふまえ、同方言の格の内部構造および下位体系を再体系化し、表 2 に示す。

表 2 について、まず、連用と連体が未分化で主語になれる格形式として I とその他の形式が区別される。また II は複合連体格助辞を持たない格形式であるが、直接補語の用法を持たないことから N 格を下段に配している。そして残りの格形式を III としてまとめ、その形式をとる主な名詞の意味タイプによって、大きく 2 つに下位区分した。なお、道具、手段から動きの関わる場所まで幅広い用法を持つ ni: 格, kara 格は両者の中間に位置するものとする。また表には示されていないが、N 格, ni: 格, Nka 格, Nke: 格は状況語にもなる。

表 2 多良間島方言の格の体系

	主要な意味機能		連用格	(複合) 連体格
I	主語や直接補語になり、連用-連体が未分化の格（主格-連体格）	名格 nominative 主格 agentive 属格 genitive	∅ 格 ga 格 nu 格	
II	ヒト、モノを指し示す名詞のとり形式で、直接補語また間接補語になる	対格 accusative1 対格 accusative2 与格 dative	ju 格 (-juba) ba 格 N 格	— — —
III	ヒト、モノを指し示す名詞のとり形式で、間接補語になる	共格 comitative 具格 instrumental1	tu 格 sji: 格	tu=nu sji:=nu
		具格 instrumental2 奪格 ablative	ni: 格 kara 格	ni:=nu kara=nu
	ヒト、モノ、また場所を指し示す名詞のとり形式で、間接補語になる	処格 locative 向格 allative 範囲格 terminative	Nka 格 Nke: 格 gami 格	Nka=nu Nke:=nu gami=nu
IV	(周辺の格 = 格の周辺)	比較 引用	-juL -ti:	— ti:=nu

以上、多良間島方言の格について再記述、考察を試みてきた。特に、*ni*: 格についてその意味用法を明らかにし、*-Nka* に格助辞と派生接辞と 2 つあることを示すことができたのは大きな成果であると考え。だが、それぞれの格形式をとる名詞（語幹）の意味レベルの分析、またその名詞と（動詞）述語とのくみあわせり方の考察は十分ではないため、他の琉球諸方言との比較も含め、稿を改めて記述する必要があるだろう。

参考文献

- 又吉里美 (2006) 「沖縄津堅島方言の場所格を表示する格助詞の機能についての新しい知見」『国文学攷』190: 1-15. 広島大学.
- 又吉里美 (2007) 「沖縄津堅島方言の手段を表示する格助詞の機能について」『日本語の研究』3(1): 49-64. 日本語学会.
- 宮島達夫 (1972) 『動詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所報告 43）. 東京：秀英出版.
- 野原三義 (1998) 『新編琉球方言助詞の研究』東京：沖縄学研究所.
- 岡田幸彦 (2003) 「物体の空間移動を表す他動詞の語彙の意味記述のための試論—補語的名詞（句）との結合関係に基づいて—」国松昭他（編）『松田徳一郎教授追悼論文集』102-114. 東京：研究社.
- 崎山 理 (1962) 「琉球・多良間島、水納島方言の音韻」『音声の研究』10: 287-305. 日本音声学会.
- 下地賀代子 (2003) 「宮古多良間島方言の格形式」『対照言語学研究』13: 37-57. 海山文化研究所.
- 下地賀代子 (2006) 『多良間方言の空間と時間の表現』博士論文. 千葉大学.
- 下地賀代子 (2012) 「南琉球・多良間水納島方言の名詞の格形式」『沖縄国際大学日本語日本文学研究』17(1): 61-83.
- 柴田 武 (1957) 「格・人称」明治書院（編）『日本文法講座〈第1〉総論』197-222. 東京：明治書院.
- 津波古敏子 (1979) 「多良間村字塩川方言の名詞形態論（中間報告）」『沖縄言語研究センター資料』10: 1-6.

A Reconsideration of Case in Tarama (South-Ryukyuan): Focusing on *-ni*: and *-Nka* Forms

SHIMOJI Kayoko

Okinawa International University / Project Collaborator, NINJAL

Abstract

Prior studies, including my previous arguments, have asserted that there are 12 to 14 case forms in the Tarama dialect: *-Ø*, *-nu*, *-ga*, *-ju*, *-ba*, *-ni*, *-tu*, *-sji*; *-kara*, *-Nka*, *-Nke*; *-gami* (*-juL*, *-ti*). However, because of a reconsideration of Tarama case, it is necessary to recognize a new instrumental case form *-ni*. Previously, this case form had been included under the case particle *ni*. I also propose that Tarama has two varieties of the form *-Nka*: the first being a case particle, and the other a derivational suffix that attaches the lexical meaning “inside” to nouns. With these two points in mind, I use this paper to provide a reanalysis of case in Tarama.

Key words: Ryukyuan, Tarama, case form *-ni*:; two type forms of *-Nka*